



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 26 日(火)

発行 館長 加藤 智 一

火伏の木

(1)はじめに

皆さんはお気づきでしょうか、日本の寺院や神社の境内には、なんとなく「イチョウ」や「ヤナギ」の木が多いことに。どうやらそれは気のせいではないらしいのです。「イチョウ」や「ヤナギ」は、「火伏の木」といって、故意に植えられた可能性が高いとか。これらの木々は、単なる景観や装飾のためではなく、火災から建物や人々を守るといった信仰や実用的な理由に基づいて選ばれてきました。今回は、「イチョウ」や「ヤナギ」が「火伏の木」として選ばれた背景や意味について、文化的・歴史的・自然科学的な観点から考察していきたいと思います。

(2)火伏の木とは

「火伏の木」とは、火災を防ぐ、あるいは火災の被害を軽減する力があると信じられてきた木のことで。日本では古来より、火は恐ろしい災厄の象徴であり、特に木造建築が主流だった時代には、火災は町や寺院を一瞬で焼き尽くす脅威でした。そのため、人々は火災除けの祈願を込めて、特定の木を植えるという風習を築いてきました。

(3)「イチョウ」が「火伏の木」とされる理由

「イチョウ」は、「火伏の木」として広く知られている理由はまず、水分を多く含む性質にあります。「イチョウ」の葉や幹は水分を多く含んでおり、燃えにくい性質があります。実際、火災が発生した際に「イチョウ」の木が延焼を防いだという記録も残っています。



また、「イチョウ」は秋に葉が落ちることで冬場に乾燥した葉が残らず、火の燃え広がりを防ぐ効果があると考えられていました。実際に京都の本能寺や東京の増上寺など、「イチョウ」が火災の延焼を防いだとされる

逸話が複数存在しており、こうした実例が、「イチョウ」を「火伏の木」として定着させる要因となったと考えられます。さらに、「イチョウ」は長寿であり、樹齢千年を超えるものも存在します。その生命力の強さが、災厄を跳ね返す象徴として信仰の対象となった可能性も否定できません。

(4)「ヤナギ」が「火伏の木」とされる理由

「ヤナギ」もまた、「火伏の木」として寺社に植えられることがあります。「イチョウ」ほど一般的ではないものの、「ヤナギ」には独自の理由があります。まず「ヤナギ」の枝は非常に柔らかく、風に揺れる姿が「火を鎮める」象徴とされました。火の勢いを和らげるというイメージが、「ヤナギ」に「火伏の力」を見出す根拠となったようです。また、「ヤナギ」は水辺に多く生育するため、「水＝火を消す」という連想から、火除けの象徴とされました。水と親和性の高い植物として、火災を遠ざける力があると信じられていたのです。さらに、中国由来の陰陽五行思想では、木・火・土・金・水の五つの要素が互いに影響し合うとされますが、「ヤナギ」は「水」に属する植物とされ、「火」を制する力があると考えられていました。

(5)寺社に植えられる意味

寺院や神社は、地域の精神的な中心であり、災厄から人々を守る場所でもあります。そこに「火伏の木」を植えることは、単なる防災対策ではなく、信仰的・象徴的な意味を持ちます。例えば境内に植えられた「火伏の木」は、火災だけでなく、邪気や災厄を防ぐ「結界」の役割を果たすと考えられていました。また、「火伏の木」は、火除けの祈願を込めて植えられることが多く、地域住民の安心と安全を願う象徴でもあります。さらに「火伏の木」を植えるという風習は、地域の伝統や文化を継承する手段でもあります。現代においても寺社の境内に「イチョウ」や「ヤナギ」が植えられているのは、こうした信仰と文化が生き続けている証ではないでしょうか。

(6)まとめ

「イチョウ」や「ヤナギ」が「火伏の木」として寺社に植えられているのは、単なる偶然や迷信ではなく、自然の性質・歴史的逸話・信仰・思想が複雑に絡み合った結果のようです。これらの木々は、火災という現実的な脅威に対する人々の知恵と祈りの象徴であり、今もなお日本の風景の中で静かにその役割を果たしてくれています。